

魔女のよせなべ

赤木かん子



魔女のよせなべ

一九八八年七月一〇日第一刷発行

定価 一四〇〇円

著者 © 赤木 かん子

発行者 原田 奈翁雄

発行所 株式会社 径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二一三三—五 影山ビル

TEL 〇三—二三四—四六〇八

FAX 〇三—二六三—七〇一九

振替口座 東京 一三二七二六

印刷 明和印刷株式会社

製本 京美印刷株式会社 積信堂

魔女のよせなべ。赤米がんと

径書房

はじめに—

魔女のよせなべ

えー、まず最初に、この妙なタイトルのことですが~~~~、別に「魔女」といっても私のことではないのだねー。

だって、私、そんな貫禄ないもん。

どうがんばったって、せいぜい「ちび魔女」か「小鬼」ぐらいだよ~~~~。

じゃあ、どういう意味かっていうとさー、ある時電車のなかで何人かで会議をしたのねー。いや、家からずっとやってただけど終わなくて、電車のなかまで持ちこしたんだけどさー、その話の中に男がひとり混じってたんだよねー。そしてあたしたちがなんかくっちゃべってて、具体的に何か決まりそうになるじゃない？ そうすると、彼はサッとペンとノートだして、それを書こうとするわけね。

いや、記録するのはいいことよ、いいことですよ、ハイ！

ところが書こうとするたんびに話はフィツとそこからそれで……別の話にいつちゃうわけね！

というわけで、彼氏はいちいちそーになにひとつ記録できませなんだの。

で、それ見てて、ヘエーッ、男の人って違うなーってつくづく思ったわけね。

だって、女はいちいち記録したりしないもの。夢中になってくっちゃべって、話はみんな、とんでるようでしっかり繋^{つな}がってて、わけのわかんないごちゃごちゃのなかから、だ

んだん形になって出てくるのを、女はゆっくり待ってるもの。

別に記録しなかったっていいんだよ。自然に形になってこないんなら、それは（たぶん）出てこなくともいいもんなだから。

そう思いついたとき、私は魔女のおなべを想像したね。

大きな黒い鉄釜でさ、なが入ってるのか全然わかんないけど、とにかくトロトロ煮えてさ、おいしそーな匂いがたちのぼってきて、そんなかからなにかが生まれてくる……

だから「魔女のよせなべ」は

賢い女たちのおしゃべりなんです。

おいしいよー



はじめに——魔女のよせなべ

その後の仁義なき本の探偵

8

焦茶色のおはし

28

かん子の舞台ウォッチング

30

男性対女性

38

ああ無情

42

マナー・マナー・マナー!

50

大阪行き〇×旅行

54

おふろだいすぎ

60

女の長距離電話

64

注文の多い公民館

68

自分の感受性くらい

75

死が最後にやってくる

104

自我と偏見

108

星をください

118

それ、ほんとう？

122

ぼくが話しかけている場所

134

にゃんこにゃんこマフラー

144

ひみつの通信きこえますか

146

うちへ帰ろう

156

マンゴーパーティ——おわりに

178

あとがき

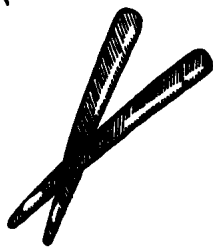
186

表紙・本文イラスト

中川大輔

魔女のよせなべ

食べてみよーかなー



その後の仁義なき本の探偵

えー『こちら本の探偵です』という本を出しまして、三年たちますが、この頃、ねエ、アレまだやってるの？ という質問をたびたび戴きます。

そ！ まだやってんのよォ、しょうくりもなく！

まあネ、もう新聞や雑誌にはそう出ないからサ、前みたいに集中してドサツとはこないけど、ポツポツ月に十通くらいは、新聞の切り抜きをとっておいなので……というのがきます。そうでなくなつて、まだ三年前ので解答してないのがあるしさ、やめるわけじゃないじゃないのよォ。

ま、いいよ。私、一生ボランティアとして細く長くやってくから。

なかにはさ、もうそろそろお手すきの頃かと存じまして……というのもあつてさ、思わず笑っちゃったよ。いいカンしてるなアって——。

そう、いっぺんにドサツとくるときより、ポツツリポツツリくる時の方が、手紙に注意がいくもんね。

『こちら本の探偵です』

「本の探偵いたします——あなたがむかし読んで好きだった本、なつかしい、だけどタイトルや作者や出版社がわからないので探しようがない——そういう本をお探しいたします。」

という広告を当時アルバイト——だったかん子さんが、年賀状代わりに四目で作った児童文学同人誌『烏賊』に載せたのは八三年暮れのこと。

ホンの埋め草記事のつもりが新聞、雑誌にとりあげられて、

でも「こちら本の探偵です」の続きを、とよくいわれるんですが、まアそれはちょっとムリだと思う。一冊埋めるだけネタを集めるのって結構大変なんだよね。やっぱ、テーマっていうか、起承転結っていうか、一冊としてのまとまりを出さなきゃいけない、となるとかなりつらいし——。

いいたいことはだいたい、いっちゃったし……ネ。

うん、だからもし今度、本の探偵の本作んなら、私としては、今まで私がわからなかったものを集めて、みんなに読んでもらって、探してもらうっていう「アナタも本の探偵をやりませんか？」みたいなものをゼヒやりたいです。

だってネ、やっぱこりヤムリだ、と思うものってかなりあるんだよ。特に私が生まれる前は——だって、私、読んでないんだもん！ ホントはラジオでもやるのが一番いいんだけどなァ……だって、聴いてる人、全員がその場で即、本の探偵になれるじゃん？ ラジオは無償だし——。

どっかでやってくんないかしらん？ 資料は提供するから。

そしたらずいぶん解決すると思うよ。今までも何度か雑誌やラジオを使ってわからない本を出したけど、ラジオが一番反応がよかった！ だって番組中に電話がかかってくるんだよ！ 私、その本、持ってますって——。

びっくり仰天、おしよせる手紙の山。かくしてはじまるは、「かん子探偵繁忙記」。

「どうしてももう一度あの本と会いたい」との依頼人の熱い想いにこたえ、わずかなヒントを頼りに図書館や本屋をかけまわって本を探しあてていく——依頼人と探偵の手紙のやりとりから「本が大好き！」ときこえてくるデヴィュ作。



径書房

一九八五年

まアそれはさておいて——そのあといくつか思いついたことがあるからそれ書くね！



※そのほかのかん子さんの本

『子どもの本とこちそうの話』

子どもの本には食事場面がじつに多い。これでもかこれでもかと続くおいしそーな描写がストーリーよりも心に残る、なんてことありません？ 食いしんぼのかん子さんが、“大切にしようね、ぼくらの第一次産業”シリーズで一気にファン層を広げた漫画家・川原 泉氏（白泉社刊『花とゆめ』で活躍中）をイラストにむかえて贈る“おいしい場面あれこれ集”。

そのうち

解答のいってないみなさん、ごめんなさい、ごめんなさい！ 決して忘れて
いるのではないのだけど、わかんない本にまで返事書いてるひまと手（文字通
り、手というのは私の手と腕を意味します。私さあ、手紙書きすぎで四十肩に
なっちゃったのネ、去年——肩と腕とこの頃は腰もやられてる。だから、なか
なか手紙書けないのよ。今までは必死になって、どんなに字が汚なくとも——
これは返事をもらった人ならわかるでしょう——手書きで書いてただけどき、
もうアカン！ ワープロかコピーになる可能性が高いね。私、どっちも本当に
嫌いなんだけどき。肩が痛いのは勝てませんわ！）がないのよ……。

そうすると、もらった六〇円切手、ただ取りすることになっちゃうからさ、
ほんっと心苦しいんだけど、ごめんネ。

それと何人が返事書いたのに住所不明で戻ってきてるもったいない手紙があ
ります。もしよかったら、ついでの時にでも教えて下さい。三年もたつと結構
みなさん、入院したり事故にあったり、結婚したり引越したり、いろいろい



ろいろあるのよね〜。私なんか、ただ机の前にすわってるだけで、他人様ひとさまの人生の不思議さに、目をみはっておりますわ！

悪いとは思うけど、往復一二〇円は、投資のつもりでいてください。

あつ、それとねー、なかには差し出し人の名前がなかったり（あるんだよ！）雨にぬれて字が消えちゃったり、あまりに達筆すぎて読めなかったり、してるのも結構あるから、まだ返事がなくて、気になる方がいらっしやいましたら、どうぞ、再度お手紙下さいませ！

手紙を読むだけなら、そう時間はかからないしね。

でもだからといって、こんなのわかんないだろーなんて遠慮しないでいいんだよ。ひょうたんから駒！偶然わかることだってあるんだから！私、いっぱい、ふーむ、ということを経験したからね、今は偶然、というか奇跡と
いうのはあるものだ、と思っております。

『赤木かん子（BOOK）術』

子供の本がいちばん！

人の心を深いところで和ませたり、ふっと自分に気づかせてくれたり、こんなやり方もあるんだよ〜と教えてくれたり、
——そんな本は子どもの本のなかにいっぱいあるんだよ！

あるときは本の探偵、またあるときは子ども図書館「海賊船」のキャプテン、はたまた児童文学同人誌『鳥賊』の編集長であるかん子さんのすすめる
『BOOK術』

その二

あのね、やってくうちに気がついたんだけどさ、二十代後半か、三十代からくる手紙って、圧倒的にこーゆーのが多いのね！

いわく、私にも子どもができました、もしくは、今十歳になる息子がおります、つきましては私が感動した本を読ませて、同じ感動を味わってもらいたいと思うので、お探して下さい——というやつね。

三十代なんて、二、三の例外は別として、もう一〇〇パーセント、こうだと思ってるじゃないよ。

うん、でね、こーゆーのをもらうたびに私は複雑な気分になるの。

だってさ、お父さんが感動したって、息子も感動するとは限らないじゃない？ 別の人間なんだからさ。

だから……別に探すのはかまわないんだけどさ、もしかしてそれで子どもたちがメーワクすんじゃないかと思うとちょっと複雑なのよねえ。

あのさ、読ませるのはかまわないと思うよ。これはお父さんがお前くらいの



シリーズ日常術⑨ 晶文社

一九八七年

時に読んで、すっごく感動した本なんだ。だからお前とこの本について話したいから、おもしろくはないかしらんけど、一応読んでみてくれっていうのはね。(私だって、もし子どもがいたら絶対ランサムは読ませるもん)

そりゃ、別にかまわないと思うよ。親にはそんならしいの権利はあると思うもん。子どもだって、それくらいしてくれたっていいさ。そんな十冊も二十冊もじゃない。たかだか一冊か二冊でしょ？

それに最近の子どもは親思いで健気けなげで優しいのが多いしさ、そういわれればお父さんをいたわって、読んでくれると思うよ。

それから、自分の親が小さかった頃を知るのだって、大事なことだもん。別に自分の親に限らなくなたって、ちょっと昔、を知るのは大事なことだ、と私は思うよ。

だけどサ、それで自分と同じように、息子にもカンドーしろ！ というのはちょっと……と思うのよね。

だって、同じ本をおもしろい！ と思って読んでくれる人間をよ、同世代で探すのだって結構むずかしいのよ！ それを、二十年も三十年も、年の違った他人(血は繋がっててもかもしれないが、アタマは他人だと思ふ)に共感しろ、

声の本●

「こちら本の探偵です」

目の見えない人だけでなく、本のページをめくることのできない人たちにとっても、本はただの紙の束。活字人間のかん子さんがこのことをきいて一念発起、発声練習からはじめひと夏をかけて語りおろしたカセットブック。



企画編集／はるふおにつく
発行／
径書房

カセットテープ九〇分二巻

一九八七年

というのは！

そりゃね、メツチャクチャ、好みとか趣味が似てて、カンドーしてくれる場合もなきにしもあらずですが、うーん、それを期待してほしくない、というのはやっぱり私の方にはあるんだよね。

だって、本で、ファッションと同じよ！ 洋服と同じよ！

ねエ、三十も年のチガウ、年上の人に、あなた、自分の服を選んでほしいと思います？

そりゃ年が六十だろーと七十だろーと、そのかたが現役！ ビカーのセンスをお持ちなら別ですがね、ココ・シャネルになら（私なんかお呼びじゃない、とは思うけど、ゼータクなもの似合わない、というところだけは、私は彼女と似ております）選んでもらいたいさ！ 両手^{もうち}をあげて歓迎しちゃうよ。

でも、たいていはそんなのまっぴら！ でしょ？ それに服は着てるあいだ我慢すりゃいいだけかもしれないけど（うーん、それでもやだな、私、我慢できない！）本はエンエンと読まなくちゃいけないんだよ！

そんなのゴーモンじゃないかあ！

だって、考えてみなよ！ お父さんのお父さん、つまりおじいさんがいくら

アーサー・ランサム

かん子さんのこよなく愛する
冒険小説『ツバメ号とアマゾン号』以下全十二巻の作者。とにかく最低二センチはあるぶあつい本。三つの家のきょうだいたちが、男女の区別なく、のびやかに帆船をのりまわす、いきいきした本。